

肥田野 直 先生をしのんで

福原 眞知子（常磐大学名誉教授，日本マイクロカウンセリング学会会長）

恩師肥田野直先生がご逝去されました。享年99才，令和二年一月，コロナ災害で，家族といえども面会が許されないという人類未曾有の出来事が勃発する直前であり，せめてものことであったと，訃報をお知らせくださった御曹司はおっしゃっています。老衰で穏やかなご臨終であったと。半年以上経つ今も，先生はすぐそこにいらしているような気がして，話しかけてしまいます。笑顔でお言葉が返ってくるような気がします。

私事ですが，先日私は自宅書庫で津田塾学生時代のノート，「心理学概論」を見つけました。それは肥田野先生ご教授の講義ノートで，卒業時私が，郷里に持ち帰ったものですが，父母の東京への転居とともにUターンしていました。先生と私の出会いは，1950年です。先生は当時津田塾で教鞭をとられておりのち，東京女子大を経て1955年，母校東京大学にもどられました。一方私はモラトリアム期および留学期を経て再度，1962年より先生のご薫陶を仰ぐことになりました。また30余年の長きにわたり私が主宰する日本マイクロカウンセリング学会の顧問としても多面的にご指導をいただきました。不肖の外弟子である私に，先生の思い出を書かせていただく機会を与えて頂いたのは大変光栄なことです。

先生の公表されているご研究領域は教育測定，教育評価，人格検査，統計です。これを生かして実践に役立つということを常に念頭に，お仕事をなさっていたようです。先生が東京大学に戻られしばらくして1959年，日本教育心理学会が創設されました。当該学会の創設は私の認識では日本の心理学史上でいわゆるアカデミックな学会としては日本心理学会，日本応用心理学会に続くものでした。肥田野先生はいずれの学会においてもご活躍になりましたがのち，教育心理学会理事長に就任されました。その時期，日本の心理学ワールドでは，「基礎か？応用か？」というようなことについても論争されたようでしたが，さらにそれは実在する人間の尊厳をキーコンセプトとしてその自己実現，問題解決や，メンタルヘルスなどグローバルな人間行動を追究する科学の展開を促すものでした。「実際に役立つ心理学を」といった声は，強くなりつつあったようです。またその頃に米国で台頭したpositive心理学やレジリエンスなどの概念は，教育的にも社会的にも歓迎されるものであり，心理学は基礎と応用を両輪とする科学にならざるを得なかったようです。

先生は丁度その過渡期に立たれておられたようで，ご苦労も多かったのではないかと拝察します。先生が後に入試センターでのお仕事に関わられたり，旭日学園でのお仕事をなさるようになるのも必然であったような気がします。

このような視点で見ると（偏見なら，お許し下さい），心理学者はやはり，scientist-practitionerであり，先生の時代はその変化への先駆けの時代，心理学はその柔軟性と多様性を持ちつつ変化してきたと思われま

す。

先生の心理学者としての道のりは，第二次世界大戦末期から，昭和，平成と長きにわたり多様です。

その一つの例を知るものとして先生ご執筆の近著に，「米国教育使節団の報告書と我が国の国語・国字改



肥田野 直先生

革一心理学者の関わり一」心理学史・心理学論, 2018 があります。

ここには第二次世界大戦後の日本の教育改革に心理学者としてかかわられた重要なストーリーの一端が紹介されています。「日本は連合軍の占領下におかれた。その指揮官であったダグラス・マッカーサーは米国教育使節団を招き、日本の教育改革の計画を立案させた。そこでは小中学児童の言語能力が低いという第1次報告に基づいて、漢字・カナの廃止が提案されたが、4年後の第2次報告では成人の検査結果からみて、第1次報告は否定された。これには、調査にあたった日本側の言語学、国語学、統計学の専門家の協力も大きい。心理学会あげての支援を忘れてはならないであろう。」(p1)。極端に言えば、そのおかげも大きく、私達はいま日本語を誇りとし、これを母国語として生活しています。先生はその折の調査チームのメンバー(教育研修所)の一人として頑張られたようです。

また上記と関連して先生は晩年、ご子息(肥田野登先生)の聞き取りで、「心理学の戦後—米国教育使節団と日米学者、一九四三～五二年」(東京大学出版会「UP」)をご執筆になりこれは本年1月より、来年8月まで、隔月掲載されるそうです。

すでに掲載された四回(ご子息肥田野豊先生ご提供)の内容を瞥見させていただくと、戦後の教育使節団の姿勢や提言にかかわった日本の心理学の様子がわかります。特にご遺稿では、その心理学グループのキーパーソンのお一人というお立ち場で語られており、先生が「生涯一学究の徒」を標榜されていたご姿勢が至る所に窺えて、大変心強いものです。第一回冒頭では戦争を憂い、「戦争は極めて悲慘且つ、政治経済を激変させることがあっても学者の良心と理性が市民のレベルでは大きな力を持ち、ひいては社会全体の動きに対しても、目に見えないところで、大きな影響をあたえうる」と述べられています。これはコロナ危機に見舞われている世界の現状に心理学者が向き合う姿勢にも通じると私は思います。終戦直後に米軍総司令部のもとに置かれた民間教育情報部に専門家として来日した心理学者クロンバック、J.博士との出会いがあり、その後の長いおつきあいが始まっています。その後導入された大学進学適性検査は、当該教育使節団からの発信とはいえ、日本側の心理学者はこれを納得して受け入れられるように検討しました。すなわち統計調査において‘適性や予測性’のあり方など、テスト理論の発達した米国からの提言であるとはいえ、そこには日本の実情に合わせたもの、そして大学進学希望者の人間発達や人格形成を視野に入れ、多面的にその適性をとらえるという見方、「配慮」が必要でありました。これはクロンバックの「選抜」と「配置」の原則にも添うものでありましたが、先生はその原則を守るべく努力なさってきたようです。

戦後の日本の教育改革時には、肥田野先生のもう一つの、大事なお役目がありました。米国心理学者 Williamson, E. G. を団長とする教育使節団講師のグループが持ち込んだ学生指導のカウンセリング(SPW、のちにSPSとして知られている)に深くかかわられたのです。このグループは、事前調査を含め、1951年から約一年、京都大学、九州大学、東京大学を拠点として、米国流教育の中核(精神)とされたSPS(Student Personnel Service)を伝導しました。ここには日本の大学から、心理学者、教育学者を含め、大学で学生と多く接する部署の職員が多くその講義に参加し、米国流の、人間中心の教育が紹介されました。これは戦後の教育改革に臨む聴講者には魅力的であり、のち日本における学生相談システムの創始に繋がりました。これはまた、日本における体系的カウンセリングの創始を促したといっても過言ではないでしょう。ここでも肥田野先生は、澤田慶輔先生(東京大学本郷キャンパス初代相談室長・教授)や中村弘道先生(日本学生相談学会創始者、現カウンセリング学会初代会長)とともに、当該研修会世話役として、また日本側の講師としてBorrow, H. 博士(ガイダンス・カウンセリング心理学)やWilliamson, E. G. 博士(カウンセリング心理学)との親交を深められ、まだ黎明期にあった日本のカウンセリングや臨床心理学の世界を眺めておられたようです。この点でも先生は日本のカウンセリングの確立に貢献されたといえましょう。ちなみにウィリアムソン著「カウンセリングの理論と実際」民主教育協会(1964)は澤田慶輔先生とのご共訳によるものです。

このように、肥田野直先生はまさに、日本の教育界において、心理学者として、一貫して基礎から応用への研究と実践を果たしてこられました。先生は不屈の学究です。

ここで先生の研究者としての一面（エピソード）をご紹介します。先生は学問に対し、一途でありませんが、謙虚な方でした。先生は常に、ご自分はカウンセリングの専門家でないといわれておりました。これは私にとって前記した文脈からはいささか疑問に思われ、一度だけ、先生にこの疑問をぶつけたことがあります。先生からのお答はありませんでしたが、その後私が先生のご助力を得て創始した、マイクロカウンセリング学会には30余年にわたり、学会、研修会、役員会など、折々の行事には欠かさずご臨席くださり、ご指導くださいました。これが先生のお応えであったのだと思います。

先生はのちにオーラルヒストリー（日本心理学会 インタビュー、2017）に、ご自分の心理学は、広がっている、というようなことを述べておられますが、このお言葉にも先生の謙虚さを感じます。需要の拡大に伴い、とかく拡散的になりがちな心理学ワールドの人人のおごり(?)を戒めるものでもありましょうかと、私的には解釈しています。基礎あつての心理学であり、実践あつての心理学、将来に向けてもぶれない心理学を追究することが、心理学徒の使命であることを先生はそのキャリアをもって示されているような気がしてなりません。手前味噌ではありますが、思えば私は米国から持ち帰った心理カウンセリングを掲げて先生との再会を果たすことができました。先生が視野広く心理学をとらえ、しかもぶれない研究を続けられていたおかげであると思っています。

また先生はご出席される国際会議では、丁寧に外国の学者らと接してこられました。私の知る限り、事後においても、知己になられたかたがたにはクリスマスカードなど欠かさず送られていたそうです。このかたがたに先生の訃報を伝えるのはつらいです。

最後に。不肖の弟子私は、いまだに先生に捧げることのできる研究をやり遂げていません。せめて先生の「生涯一学究の徒」の精神を継承させていただこうと思っています。

あらためて先生のご冥福をお祈りいたします。

参考資料：

肥田野 直 往時片片—心理学徒の軌跡 日本文化科学社 1994

肥田野 直 オーラルヒストリー 心理学ミュージアム 日本心理学会 2017

肥田野 直 「米国使節団の報告書と我が国の国語・国字改革—心理学者の関わり—」 心理学史・心理学論。2018

肥田野 直 心理学の戦後—米国教育使節団と日米学者、一九四三年～五二年 UP 東京大学出版会 2020

E. G. ウィリアムソン 著 「カウンセリングの理論と実際」 澤田慶輔・肥田野直共訳。民主主義教育協会 1964

W. P. Lloyd 著 カウンセリングへの道 (Student Counseling in Japan-A Two-Nation Project in Higher Education) 福原真知子訳 風間書房 1998

なお先生のご著書（主著・共著・編集）および論文は上記を含め多数。

肥田野 直 東京大学、大学入試センター名誉教授 勳二等瑞宝章